

日本社会における「交換留学生主導型インターンシップ授業」の構築

The Development of 'Student Initiative Type Internship' Course for International Exchange Students in Japan

恒松 直美 (広島大学)

Naomi Tsunematsu (International Center, Hiroshima University)

総合学術学会誌 第12号 日本総合学術学会 2013年
Journal of Society for Interdisciplinary Science, Vol.12
Japan Society for Interdisciplinary Science, 2013

日本社会における「交換留学生主導型インターンシップ授業」の構築

The Development of 'Student Initiative Type Internship' Course for International Exchange Students in Japan

恒松直美 (広島大学)

Naomi Tsunematsu (International Center, Hiroshima University)

Abstract:

This article examines the new development of "student initiative type internship" course for international exchange students titled "Globalization Support Internship" at Hiroshima University. Aiming at the establishment of the mutual support system of international education of university and the local society, I shifted the paradigm of the course from "customer type" internship in which an intern tended to be an observer, towards the "student initiative type" internship in which interns take initiative to support the local society facing globalization. In this new internship course, international interns have challenged to conduct the market research for a local industry as "a globalization support research project", and to organize the international exchange tour to the local island as "a globalization support project". Through the work experience and actual association with people in the local society, interns have developed leadership and sense of responsibility by cooperating with other interns to achieve the goals together.

Keywords: Exchange Students, Internship, Japanese University, Globalization, Leadership

1. はじめに

本稿では、広島大学短期交換留学生向けの「グローバル化支援インターンシップ」授業を、交換留学が地域社会とともにエンパワーメントし、交換留学生主導で仕事を進めていくインターンシップの授業へと発展させる実践的方策について論じる。2011年度にパイロット・スタディを施行し、2012年度秋学期より新しく「グローバル化支援インターンシップⅠ：キャリア理論と実践」・「グローバル化支援インターンシップⅡ：実習」と題して交換留学生主導型のインターンシップの授業を開講した。2003年度より2011年度まで開講した地域企業と市役所への「派遣型」の「HUSA インターンシップ」¹を2012年度よ

り「学生主導型」の「グローバル化支援インターンシップ」へとパラダイム転換を図った。

交換留学生向けインターンシップの授業を学生主導型で進める挑戦は、現在グローバル社会で大学に期待される教育成果とも関わりは大きいと考える。本授業は、交換留学生と本学の日本人学生を地域社会と連携し発展させる授業である。地域企業や官公庁と議論しつつ学生が研究とプロジェクトを担当し、学生の主体的かつ積極的な参加による地域と連携した新しい学びの空間を創造する。本授業は、グローバル社会において大学が形成し得る、多国籍の学生

「HUSA プログラム」と称し、プログラムに参加している交換留学生を「HUSA 留学生」と称する。詳細はHUSA プログラムホームページ(2013)参照。また、2003年度からの広島大学短期交換留学生向けインターンシップの発展については、例えば、恒松(2011, 2012a, 2012b, 2012d)を参照。

¹ 本稿では、「広島大学短期交換留学プログラム」(“Hiroshima University Study Abroad Program”)を略称で

が意欲的に参加できる授業方法の開拓への挑戦でもある。

初めに、交換留学生向けインターンシップの授業のパラダイム転換においても参考となる学生参加型の授業の意義について論じる。現在、高等教育の大衆化、情報化や知識社会化とともに大学で教えられる学問体系も大きく揺らぎ、学生がまとまった構造化された「知」を獲得することができなくなっているとの指摘がある(天野 2004)。情報量が加速度的に増加し、体系化した知の習得が困難となり、大学教員による一方的講義型の授業では知識を網羅し伝授することが困難となっている。大学生が意欲的に取り組める学生参加型授業の開発や討論を導入した双方向性授業の開発など、学生中心の行動的学習や参加型授業による成果が必要とされている(安部ら 1998)。

安部ら(1998)は、学生参加型学習による教育成果の多様性について言及している。例えば、授業内で小グループを構成し、グループにおけるリーダーと役割分担を決定し、各グループ員の能力を最大限に引き出し、学生間で問題解決をする授業方式である。各グループの学習進行状況を常に授業で公表し、内容を授業で討論し修正していく。学生間の相互反応と相互影響により学生同士が自らを客観視し、グループ作業により決断力、リーダーシップ、協調性、責任感などを促す(安倍 1996; 安部・寺沢 1997; 寺沢ら 1997; 安部 1998 を参照)。

安部ら(1998)は、学生参加型授業がもたらす高い教育効果と教育の生産性として、「活発な討論能力、コミュニケーション能力、リーダーシップ、協調性、共同作業能力、責任感、社会性の把握、能動的行動力、チームワーク能力、知識発見、自己発見、自己能力開発など」を挙げ、学生が自ら知識を発見し、他の学生の多様性から多様な幅広い視野の知識の発見があることを強調する(安倍 1996; 安倍 1998, Barr・Tagg 1995, Greeberg 1995, Jhonstone 1993 を参照)。

新「グローバル化支援インターンシップ」では、留学生インターンが、実践を通じて日々力をつけ、前述の教育成果を顕著に表している。留学生インターンには、主役は学生であることの自覚を促し、学生が自ら考えて動き、学生間のチームワークを生かし、協力して成し遂げる重要性を伝えている。本授

業では、皆で情報を共有し、各インターンが持つ能力を生かし、相互に支援し協力して仕事を進めるシステムを創った。

さらに、大学が形成し得る大学外をも巻き込んだ学びの空間の創出という点において、本授業は大学の学びの空間を地域コミュニティを含むグローバルな学びの空間へと拡大している。天野(2004)は、人間形成空間としての大学の問題を指摘し、大学の存立・発展の基盤の弱体化への懸念を表明している。大学が学問をするものの共同体であり、一つのコミュニティであるとする考え方が弱まる状況において、学生同士の関係や学生と教員との関係を再創造し、学生による教育プロセスへの参加、大学コミュニティへの帰属感を持つ重要性を説いている。

「グローバル化支援インターンシップ」は、共に研究プロジェクトに取り組み協力して仕事を遂行する留学生間の結束を強め、学生同士の相互支援により一人では不可能なプロジェクトも遂行可能となることを実感できる授業である。また、留学生の知見を生かし、地域企業の持つ現実的課題や地域社会との国際交流企画に取り組むことにより、広島大学のおかれる地域社会への貢献を通じ、大学の所属する地域コミュニティとの一体感も生まれる。さらに、自らの提案が生かされる体験により、留学生インターンが自己効力感を持ち、エンパワーメントが促進される変容が見て取れる(恒松 2012a, 恒松 2012b)。

2. 「グローバル化支援インターンシップ」の変革

2012年度後期(秋学期)に新たに「グローバル化支援インターンシップ I: キャリア理論と実践」と「グローバル化支援インターンシップ II: 実習」を開講するに至るまで、教員の省察的实践を通じ本授業の改善を行ってきた。Iの授業の主な構成は、企業等と接する上で必要となる日本社会における基本的礼儀や対応の仕方に関する講義と電話応対や自己紹介などの実践的訓練、企業や官公庁から講師を招聘して社会体験を聴く全学公開の「社会体験者講話」と講話に基づく日本人学生も参加する PBL 協同学習(課題発見解決型学習)、全学募集で日本人学生も参加するグループ・ディスカッションである。Iの授業の目的はIIの実習に向けての礼儀やマナーを含む実践力の習得と自らの実践力と仕事の現実につい

ての期待マネジメントである。

2011年度のパイロット・スタディにより、インターンが自分の能力を超える非現実的な期待を実際の仕事現場に求めることを防ぐために、期待マネジメントを初期の段階で行う重要性が認識できた。交換留学生インターンがⅡの実習を現実社会と連携して行うにあたり、日本での社会体験を持たない留学生が自らの実践力と実務能力を理解することは不可欠である。そのために、2012年度より「インターンシップ・プレースメントテスト」と面接試験（電話応対テスト）を導入した。これらの試験により、受講希望の留学生は、企業と仕事をしていくために必要な日本語能力の高さと判断能力について認識する。そして、「夢のインターンシップ」(dream internship)²は現実にはあり得ないことを理解する。本授業の指針は、2011年度までの教員の交渉により顧客的に学生を派遣するインターンシップを変革し、仕事の準備段階から仕事の現実的側面をインターンが認識し、実際の実力に見合った仕事を主導的に進めることである。それを機能させるためには、担当教員による企業等との交渉や留学生インターンへの支援と指導は不可欠である。しかし、観察者的存在であった留学生インターンを仕事を遂行する主役へと転換したことは大きな変革である。

新しく開講した「グローバル化支援インターンシップ」の授業における変革は以下に挙げられる。

1) 受講生の日本語能力の評価と選考

授業第一回目に受講者を決定する試験を課す。授業の受講条件を「日本語上級」かつ「インターンシップ・プレースメントテスト」及び「面接試験」合格者とし、授業の受講者の決定時にインターンとして必要な日本語能力と実務能力レベルを明示する。本試験の導入により、受講希望者が、自身の日本語能力がインターンシップにおける企業とのコミュニケーションや連絡・報告などが可能なレベルであるのかを認識できる。「プレースメント・テスト」と電話

応対テストでは、ビジネスや地域社会との連携の際の現実的状況を設定し、連絡・報告・対応が必要な状況において適切な対応が可能であるかを問う。日本語能力と仕事における現実的状況で対応する力を試すとともに、学生が実力に見合った授業への期待を持つための期待マネジメントでもある。

2) 「学生主導型」へのパラダイム転換

企業等に2週間派遣する「顧客型」インターンシップ(2003~2011年度)から「学生主導型」で調査や企画を進める「グローバル化支援インターンシップ」にパラダイム転換を図った。インターンは「グローバル化支援研究プロジェクト」と「グローバル化支援プロジェクト(企画やスクール・インターンの仕事など)」を行う。

「顧客型」では企業等で留学生インターンが主体的に仕事をするのは少なく傍観者的なものが多かった。「学生主導型」では、インターンが主体性を発揮し、自らの意見を述べ、研究プロジェクトや企画を共同で遂行するものと変革した。この変革はインターンの動機づけを促し、自発的かつ意欲的に日本社会と関わる仕事に取り組む新しい挑戦の場を創り出した。

3) 会議参加と実務の体験

企業や市役所との会議に出席して主体的に意見を述べ、議事録を取る機会を作った。「顧客型」インターンシップでは、学生は企業内におかれるが、仕事の主体ではなく、自ら仕事について考え進める機会はほとんどなかった。本授業では、企業との会議にインターンが仕事を遂行する主体として出席し、仕事についての議論に参加した。会議の議事録作成も担当した。会議出席者は、授業での他のインターンへの報告も担当し、インターン全員が情報を共有するシステムを構築している。

4) 中間試験による努力の評価

電話応対テスト等の中間テストを行い、インターンの実践的能力向上に向けた努力を評価し、教育成果と改善点を明確化する。

5) 日本人学生も参加したグループ・ディスカッション(全学で募集)

「グループ・ディスカッション」を導入し、全学公開で参加者を募集し日本人学生と留学生

² 2012年6月にアメリカのUniversity of California, Berkeleyにて開催された'Global Internship Conference'において多くの発表者が期待マネジメントの重要性を強調していた。そこで'dream internship'('夢のインターンシップ')という用語を使用し、学生が描く非現実的なインターンシップについて言及があった。詳細は、Global Internship Conference ホームページ参照。

インターンによる討論の場を持つこととした。グローバル化社会に関するテーマなどについて論理的に考え、グループで討論し、協力してまとめ提示する力を試す機会を持つ。就職活動等の社会体験で既に力をつけている日本人学生の参加は、留学生への刺激になるとともに日本社会で必要な力を認識する機会をもたらす。日本人学生にとっても日本語の堪能な留学生との日本語での議論は刺激となり、また、異文化からの視点を知る機会となる。

6) 日本人学生支援員による支援制度の導入

社会体験を持つ日本人支援員による支援制度を導入し、留学生インターンと日本人学生が共にグローバル社会で生きる力をつける授業を構築する。「グローバル化支援研究プロジェクト」や「グローバル化支援プロジェクト」としての国際交流企画を留学生インターンが進め、その支援を日本人学生が行うシステムを構築する。企業や市役所等との会議にインターンと支援員が参加することで、インターンは社会体験を持つ日本人学生の儀礼や言葉づかいをモデルとして学び、支援員は留学生インターンの持つ多様な価値観や知見を学ぶ場を持つ。

7) 仕事の進行状況に関する学生間の情報の共有
留学生インターン全員と日本人学生支援員とで進行中の仕事や企画についての情報について、議事録や電子メールで情報を共有し、学生間の相互支援を促進する。企業等との会議や授業での決定事項は担当の学生が議事録をとり、次回の授業で配布し説明する。学生全員が授業全体を把握しつつ1年間のインターンシップを進めていく。学生間の情報共有により、各自の学びを他の学生への支援に生かせる。

8) インターンの主導性と役割の明確化

留学生インターンが自ら動き、提案し、仕事を進めていく主役であることを継続的に喚起し、自ら考え動く重要性を伝える。留学生インターン間の連絡、会議の調整、国際交流企画のための地域の調査と企画など、教員の指示と監督のもとインターンの担当を明確にし、インターンの力で可能なことは自ら主体的に進める。本年度は、主に(1)「グローバル化支援研究プロジェクト」としての地域企業の市場調査と(2)

「グローバル化支援プロジェクト」としての地域との国際交流ツアーの企画を7人のインターンが協力し進めている。各プロジェクトについてチーフとサブチーフを決めプロジェクトを進めたことで、学生のリーダーシップ育成の機会となった。(1)(2)とも、インターン7人が協力し、意見を述べ、議論する場を持ち、学生の手で作り上げるプロジェクトとなった。担当意識を持ち仕事を遂行する体験を通じ、インターンは実際にチームで仕事を進めていくうえでの困難や問題への対処法を学ぶ。

これらの変革は、2012年度のパイロット・スタディの結果、本授業を機能させるための施策としてその導入が必要であると判断した結果である。

3. 「グローバル化支援インターンシップ」の受講条件と受講者

授業の受講条件として、「グローバル化支援インターンシップⅠ：キャリア理論と実践」（秋学期に開講）に登録した学生のみ「グローバル化支援インターンシップⅡ：実習」（秋学期と春学期の通年開講）を受講可能としている。2012年度秋学期に「グローバル化支援インターンシップⅠ：キャリア理論と実践」に受講登録した交換留学生の出身国は、中国4人(女性4人)、台湾2人(女性1人、男性1人)、イタリア1人(男性)の合計7人である。7人のうち、台湾の学生2人と中国人女子学生1人の合計3人が大学院生で、あとの4人は学部生である。「グローバル化支援インターンシップⅡ：実習」に登録した留学生は5人である。中国出身の女子大学院生1人と台湾出身の女子大学院生1人の2人は、Ⅱには登録せずボランティアとして関わっているが、意欲旺盛で、中国出身の大学院生は地域との国際交流ツアー企画ではチーフを務め、リーダーシップを発揮している。正式に授業登録をしなかった理由として実習の面白さを認識していなかったと述べている。スクール・インターンとしての他の留学生インターンによる講義や企業との市場調査に関する会議にも自ら希望して出席している。学生は学生主導で自らの意見が反映され実行に移す仕事のおもしろさを実感した場合、自ら積極的に参加する態度を見せている。

語学条件に関しては、パイロット・スタディの結果から日本の地域社会とのインターンシップには上級の日本語能力が不可欠であることが分かり、2012年度は受講条件を日本語上級とした。地域社会との連絡や情報伝達、企業との会議参加、調査の遂行のためには日本語能力が不可欠である。日本語能力が上級でない場合、常時通訳と翻訳をつける必要があり現実的に機能しない。日本の地域社会と関わり仕事を遂行する本授業では、日本語能力と日本社会の地域特殊性の理解が不可欠であり、その上で交換留学生の持つ異文化性を生かすことが、留学生のインターンシップを実現化する現実的方策であるとの結論に至った。

4. 企業の「グローバル化支援研究プロジェクト」

2012年度の「グローバル化支援研究プロジェクト」では、東広島市にあるH社の商品に関する市場調査を行っている。H社の製品の中国市場の開拓が進行中、今後の対策について検討したいとの意向を受け、留学生インターンが市場調査の支援を行う研究プロジェクトに取り組むこととした。調査を遂行するために以下の段階的ステップを踏んだ。

1) 研究プロジェクト・テーマの提案

車に強い関心を持つ日本人支援員が考案した「中国における市場開拓の可能性に関する市場調査」の提案をH社に提示した。会議には、担当教員、日本人支援員、H社の経営管理グループマネージャーを含む職員3名が参加した。H社には「社会体験者講話」で「グローバル人材とは」と題した講話もお願いした。講話に基づくPBL協同学習のプレゼンテーション評価にも参加をお願いし、留学生インターンと授業で接し、事前学習を観察する機会を持った。³

2) 研究プロジェクトのテーマと調査日程の決定

プロジェクトの詳細を決定するため企業で会議を開催し、経営管理グループ及びカスタマーグループ職員、インターンシップ担当教員、留学生インターン2人、日本人支援員が参加した。H社の製品に関する現在の市場開拓の状況とアンケート調査の目的を明確化し、調査対象と調査の規模、調査結果の発

表の日程を決定した。市場調査のためのチーフとサブチーフを務める留学生インターンも決定した。

3) 授業での報告と詳細の決定

会議後、会議に出席したインターン2人で議事録を作成し、担当教員の指導により改訂し、次回の授業で報告した。この過程でインターンは仕事の内容を明確かつ正確に記録し報告する重要性を学ぶ。報告を受けた他のインターンも自分が出席していない会議での決定と進行状況について把握し、授業の全体像を捉えるしくみにした。アンケート調査の設問について各自が考え提出することを次週の授業の課題とした。

4) アンケート調査票作成と内容の再検討

留学生インターン全員でアンケート調査票を作成する過程で、未経験から学生の戸惑いが感じられたため、臨時授業を行い、再度、アンケート調査の実行可能性について検討した。その結果、現実的施策として、企業より理想として挙げられた調査規模を縮小し、7人の留学生インターンが遂行可能な規模に変更することとし、企業に報告した。

5) アンケート調査票の設問の決定

次週の授業で各自が設問のリストを提出し、クラス全体でそれについて議論した。事前にインターンが集まり設問をカテゴリー分けし、設問を整理して提示した。授業では最終案に向けて議論した。

6) 企業へのアンケート調査票第1案の提出

チーフが最終案をまとめて教員に提出し、確認後、H社にアンケート調査第1案を提出した。

7) アンケート調査票第1案について企業と会議

市場調査のアンケート調査票の第1案について企業と会議を開催し、担当教員、企業の経営管理グループマネージャー、カスタマーグループ職員、留学生インターン3人、日本人支援員が参加した。インターンよりアンケート調査票について説明をした。事前に会議での調査票の説明の担当と参加者を決定すると、インターン3人は自主的に集まり説明の準備をし、自主的に改定案を教員に提出してきた。学生には企業への書類提出は1回を想定すべきで、本来、第1案を提出する前に十分検討しておくべきであることを伝えた。今回は、既に提出した第1案に加え、改定部分を明示した改定ファイルを会議で提示することとした。仕事で決定権を与えられ、発表する立場におかれた留学生インターンは、責任を持

³ 恒松(2011)参照。またHUSA留学生向けのインターンシップ全般に関しては、恒松(2013)の研究ホームページを参照。

って自ら行動を起こすことに注目したい。現在、企業からの第1案についての助言をもとに修正案を作成中である。

これらの活動を通じ、留学生インターンは社会で仕事をする際に必要となる力を多角的に学ぶ。社会との関わり方、仕事における役割の自覚、主体的に仕事を進める意義、自身の職業的将来像、自分という人間と向き合う自己認識、自身の仕事への動機づけと学習意欲の原動力など、安部ら(1998)が指摘する、教師中心の授業からは得られない、学生中心の行動的学習であるからこそその学びである。特に、留学生インターンが他の学生と協力しつつ、提案し、決定していく作業は、能動的に動く力をつけ、現実社会での問題への対応能力を向上させる。

企業と会議を持ちつつ進める市場調査においては、実際に企業を訪問し、自分で作成した名刺を渡し、自己紹介する機会を持つとともに、仕事を動かす主体として意見を述べる。これらの体験は大学外の日本の実社会と接した実感をもたらす刺激となっている。会議では、学生に市場調査を主導で進める立場にあるとの自覚を促しつつ、決定を行っていく。会議後は会議に参加したインターンが議事録を作成し、教員の確認後授業で配布し、その説明を授業で行う。なるべく学生の主体性を導き出し、教員の役割はその支援であるとの指針で進めている。

HUSA 留学生は多様な文化的背景と価値観を持っている。多国籍の留学生で行う協同作業では、異なる価値観から発生する意見の相違や問題に遭遇する。例えば、PBL 協同学習で初めて留学生と協同学習をした日本人学生が気づきとして指摘する点に、留学生の持つ自分とは全く異なる視点からの発言がある。市場調査のためのアンケート調査作成の過程では、実際に留学生インターン間で意見がかみ合わず問題も発生した。人と人との意見の相違による問題発生の状況こそ、実社会で仕事をする上で経験する問題の縮図であり、留学生インターンが成長する場となる。異なる意見が出できた際、いかに論理的に議論を進めアンケート調査票をまとめるか、どう対応することで人と人は合意に至るのか、合意できない場合はどのような手順を踏んで問題を解決すべきか、といった実社会での問題に取り組む機会となる。その体験は、コミュニケーション能力、リーダーシップ、協調性、責任感、チームワーク、人間理解、自

己能力開発など、人と関わりつつ社会で仕事をするうえで必要となる能力を磨く体験となる。特に本授業は異文化による価値観の相違への対処について学ぶ場となる。

5. 地域国際交流企画：異文化コーディネーターインターンシップの開拓

HUSA 留学生と地域社会との国際交流の場を創る「江田島国際交流ツアー」の企画と実行を行うインターンシップに現在挑戦している。企画実行は2013年4月末である。担当教員の支援で企画のプランニングから留学生インターンが仕事に従事し企画を進めることにより、地域社会との国際交流行事を企画する力をつけることが可能となる。訪問場所についての調査と経路の決定、時間調整、募集要項の作成と配布、参加者への連絡と申込者リスト作成、ツアーガイド作成など、ツアーの企画に必要となる仕事や準備について、自ら考え行動し学ぶ。ツアーには江田島市移住者を含む住民や江田島市の定住促進室の職員との国際交流の企画もあり、江田島市と話し合いつつ交流の内容を決定している。そのステップは以下の通りである。

- 1) 教員と日本人支援員とで江田島市役所総務部企画振興課を訪問し、HUSA 留学生との国際交流の発展の可能性を打診し、「社会体験者講話」の依頼をした。事前に授業で江田島市の取り組みについて講話を行うことで、市の職員が本授業の概要を把握しやすくし、学生もより意欲的に国際交流企画に取り組むことを想定した。
- 2) ツアー企画を促す意図で、授業で江田島市役所のホームページから抜粋した情報を学生に配布し、江田島市に関する知識を提供した。江田島市で訪問を希望する場所を各学生がまとめることを次回の授業までの課題とした。
- 3) 各学生が提出した希望する訪問場所について、その実行可能性と概要について皆で議論した。
- 4) 江田島市の訪問場所の概要に基づき、担当の留学生インターン(チーフとサブチーフ)が距離やかかる時間を調査して日程案を作成した。教員の指導のもとにHUSA 留学生への広報と申込用紙の第1案を作成した。
- 5) 広報と申込用紙の最終ファイル作成のため、担

当留学生インターン、教員、日本人支援員でミーティングを開催し改訂について確認した。

- 6) 教員より江田島市に連絡し、広報と申込用紙及び国際交流会の提案を提出し、助言を仰いだ。また、ツアーの1か月前までにモニター・ツアーを行うことを提案した。モニター・ツアーでは、国際交流会についての打ち合わせと異文化理解に関する講義を行うことを提案した。
- 7) 担当インターンより参加対象であるHUSA留学生に向け、ポスター及び申込用紙をメールで送信し参加者を募集した。締切後、参加希望者リストを作成した。
- 8) 国際交流ツアーの経路の決定や国際交流会について具体的に決定するため、モニター・ツアーとして、教員、留学生インターン、日本人支援員で江田島市役所総務部企画振興課を再度訪問した。現地の方々からの助言によりツアーの内容について、より交流が深まり歴史を学べる内容に変更を加えることを決定した。移住者支援を行う組織の代表も会議に参加し、提案をいただき、グループを構成して行う国際交流会の内容も確認した。
- 9) 会議での提案及び確認に基づき、2013年4月末のツアーに向け、留学生インターンが経路の改訂版作成とツアーガイド作成を行っている。

鈴木(2000:115)は、日本語教育において、留学生と日本人が接触し相互作用をおよぼす学習活動への取り組みが盛んになったことを指摘し、地域や社会への参加を主体にしたインタラクティブな活動が、学習者の自己変容を促進し、コミュニケーション能力を含む異文化適応能力を育成し得ると述べている(安場1991、山田1996、西口1999参照)。これらの活動は、言語能力の獲得と異文化理解の場のみではなく、自己変容と自己実現の可能性の場ともなり、その変容は接触する日本人にももたらされると論じる(前掲)。HUSA留学生インターン・日本人学生支援員・地域社会の連携で進める「グローバル化支援インターンシップ」はその現場となっている。

留学生インターンによる地域との国際交流企画は、社会の現場で生かせる日本語能力の向上のみではなく、日本社会で人と仕事をする上で必要とされる力をつける場となる。授業で学生が多様な意見を出し

合う場面で率先して自分の意見を述べるためには、コミュニケーション能力や考えをまとめて理論的に伝える力などが試される。社会体験を持つ日本人学生支援員制度により、その経験知を留学生が学べるとともに、支援員も留学生の多様な価値観を学び、自らの体験が国際教育に生かされる実感を持つ。

授業で企画の内容や広報を決定した際、学生からは異なる意見が出た。広報のポスターや申込書の内容を最終決定する段階では、提示すべき情報や提示方法など活発な議論が起こった。これらの体験を経て、1つの企画の実行には多くの過程があり、それらを議論しつつ決定して仕事が遂行されることを学生は学ぶ。本授業では、自分の持つ知見や意見が企画に反映され成果となり現れる体験を持つ。自らの考えが現場に反映されることで、学生は主体的に動く重要性を認識し、それを態度に表し始める。

6. 総合考察

交換留学生向け「グローバル化支援インターンシップ」の授業は、HUSA留学生が日本留学を通じ、学術知を実践知と結び付ける重要な役割を果たしている。約1年間の広島大学への交換留学の体験による意識変容の結果、留学生は、人との関わりを通じて異文化を理解し、自分自身のアイデンティティや自己と世界との関係について問い直し、人への支援の要望が高まる傾向が強い。留学体験が、自国・日本・世界と自己についての見解を変容させ、世界観の再構築をもたらしている(恒松2012c)。

Mezirow(1994)は意識変容の研究で異文化での影響や価値観の枠の変革について述べているが、HUSA留学生は、日本人学生や世界各国からの留学生との出会いにより、新しい価値観に触れ変容している。新「グローバル化支援インターンシップ」の授業では、大学内だけでなく、大学外の地域社会とも連携し、社会人と接しつつ現実的に仕事を体験する場の構築を目指す。現在、本授業は、留学生が自らプロジェクトを動かす主体となり、仕事を進めていく授業となりつつある。留学生が、日本の地域社会と関わるプロジェクトで、自分の力を発揮でき、それによる成果を自分で確かめられる授業へと変容しつつある。留学生インターンの態度は、受動的態度から、仕事を自ら考案し創る能動的態度へと変容

してきた。交換留学生主導型インターンシップへと変革した本授業は、留学生インターンが自己と日本社会との関わり方を、将来のキャリアを含め、自主的に模索していく可能性ももたらすと考える。

本授業で2010年度に導入した「社会体験者講話」からも留学生インターンは影響を受け、大学教育の意義づけや将来のキャリアなどについて意識を変容させている(恒松 2012d)。留学中にその社会で仕事をする人々と接触する体験は、その国への興味をより喚起し、留学後にその国と関わる具体的方策への思索をもたらすと思われる。地域社会と人として接し主導的に関わっていく「グローバル化支援インターンシップ」にやりがいと喜びを感じている留学生インターンの姿は、パラダイム転換をした本授業の新しい方向性の意義を実証しつつある。

引用文献

- [1] 安部和厚 (1996) 「大学における教授法の研究」『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』 第1号, pp.170-189.
- [2] 安部和厚・寺沢浩一 (1997) 「大学における知識伝達中心授業から学習中心授業への転換 - 多人数クラスにおける学生中心小グループ学習モデル - 」『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』 特別号, pp.128-137.
- [3] 安部和厚 (1998) 「教育の生産性とその評価 - 学生の参加型授業からみて - 」『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』 第3号, pp.138-142.
- [4] 安部和厚、小笠原正明、西森敏之、細川敏幸、高橋伸幸、高橋宣勝、大雄二、小林由子、山舗直子、大滝純司、和田大輔、佐藤公治、佐々木市夫、寺沢浩一 (1998) 「大学における学生参加型授業の開発」『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』 第4号, pp.45-65.
- [5] 天野郁夫 (2004) 『大学改革 - 秩序の崩壊と再編 - 』 東京大学出版会
- [6] 鈴木潤吉 (2000) 「地域の国際交流の学びとは? - 赤井川村での留学生ホームステイにおけるホストと留学生の反応から - 」『僻地教育研究』 第12号, pp.115-124.
- [7] 恒松直美 (2012a) 「省察的实践と『グローバル化支援インターンシップ』 - フェミニズム理論とエンパワーメントのパラダイム - 」『広島大学留学生教育』 第16号, pp.1-15.
- [8] 恒松直美 (2012b) 「大学教育と社会の相互支援を目指した短期交換留学生インターンシップ - 『グローバル化支援インターンシップ』パイロットスタディ - 」『広島大学国際センター紀要』 第2号, pp.1-15.
- [9] 恒松直美 (2012c) 「短期交換留学生の日本留学による意識変容」『留学生教育』 第17号, pp.51-60 (JAISE, Japan Association for International Student Education).
- [10] 恒松直美 (2012d) 「短期交換留学生向けインターンシップ授業 - 企業体験者講話の導入と留学生の意識 - 」『総合学会誌』 第11号, pp.11-18.
- [11] 恒松直美 (2011) 「短期交換留学生向けインターンシップ授業における企業体験者講話とPBL (課題発見解決型学習)」『広島大学留学生教育』 第15号, pp.47-61.
- [12] 恒松直美 研究ホームページ <http://home.hiroshima-u.ac.jp/ntsunema/sangakurenkei.html> (2013年2月25日閲覧)
- [13] 寺沢浩一、安部和厚、牛木辰男 (1997) 「作文添削の試み - 一般教育演習『ことばと医学』から - 」『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』 第2号, pp.243-256.
- [14] Barr, R. B. and Tagg, J. (1995), "From teaching to learning: A new paradigm for undergraduate education", *Change* 27, 13-25.
- [15] Global Internship Conference (GIC) <http://globalinternshipconference.org> (2013年2月14日閲覧)
- [16] Greeberg, J.D. (1995), "Active learning - Active teaching: How do you get there from here?", *National Society for Experimental Education*, 4-27.
- [17] Jhonstone, D. B. (1993), "Learning productivity: A new imperative for American higher education", *Studies in Public Higher Education* (State University of New York), 1-32.
- [18] Hiroshima University Study Abroad Program (HUSA) http://www.hiroshima-u.ac.jp/en/husaprogram_incoming (2013年2月14日閲覧)
- [19] Mezirow, Jack. (1994), "Understanding transformation theory", *Adult Education Quarterly* 44 (1), 222-232.